

KSCA 会報

Vol.17 2017.11.15

目次

PAGE 1 - 3

(1) きんたろう
キャンプについて

PAGE 3

(2) RIFCR研修
の報告

PAGE 4-5

(3) 場面緘黙につい
ての基礎知識

PAGE 5

(4) KSCA連絡先

(1) きんたろうキャンプについて

1) 「不登校対策自然活動体験事業 きんたろうキャンプ ー参加し易いプログラムや今後の活動等についてー」

関東学院大学 カウンセリングセンター
臨床心理士
綿貫 春利

「不登校・キャンプ」というキーワードから、みなさんは
どのようなイメージをお持ちになるでしょうか。

「元気で活発な子達が参加している所なのかな。」
「いつも家に居るような、うちの子には向いていないか
な・・・」

どうしても「不登校」と「キャンプ」との言葉の間にギ
ャップを感じて、違和感や不自然さ、ましてやキャンプへ
の参加となると躊躇してしまう児童・生徒や親御さんも多
くいらっしゃるのではないのでしょうか。

私自身もこのキャンプ事業に関わる以前は、不登校児
童・生徒の中の、限られた一部の層が対象となるプログラ
ムなのかと思っていました。

しかし、実際に足を運んでみると、キャンプや自然体験
活動ということで、定番のカレーライス作りやバウムクー
ヘン作りといった野外料理プログラム、フリスビーを使っ
たディスクゴルフや自然材を使ったクラフトプログラム、
さらには動物とふれあうプログラムなど、対人不安が高め
であったり、体力に自信がなかったりする児童・生徒が日
常から離れ、ちょっとした遠足気分に参加できるプログラ
ムが数多く用意されています。

また、今年度からは「1日大学生体験」として、書字の
苦手な小学生でも面白く感じられるような、大学での実験
体験を行うプログラムも、関東学院大学とのコラボレーシ
ョンプログラムとして始まりました。

キャンプに参加をされる方々は、日帰りや一泊の親子プ
ログラムを何度も繰り返し参加される方もいらっしゃるま
すし、親子キャンプを何度か体験された後に、子どものみ
を対象とした宿泊数の長い活動的なプログラムに参加され
る方もいらっしゃいます。

キャンププログラムについては、どの活動も内容を詰め
込みすぎず、不登校児童・生徒達のペースで行えるような
工夫があります。また、期間が長ければ楽しい、活動がダ
イナミックであれば満足度が高いという訳でもなく、日帰
りや一泊でも十分に満足され、キャンプの効果を感じてい
る方が多いようです。

キャンプの運営にあたっては、きんたろうキャンプの専
属スタッフが指導運営にあたっており、男性・女性の両方
で構成されています。それぞれに教員免許やキャンプに関
わる専門資格も有しており、子どもたちにも人気の方々の
です。さらに、教職課程を履修している学生や、心理学科の
学生達もキャンプボランティアとして参加しております。
また、このキャンプにはKSCAも携わっており、担当の
心理士がほとんどのキャンププログラムに同行し、キャン
プ全体のオブザーブや参加児童・生徒の行動観察、親御さ
んとの相談などを行うとともに、定期的にミーティングを行
いながら、不登校キャンプへの指導助言を行っています。

きんたろうキャンプを運営している神奈川県立足柄ふれ
あいの村は、2016年度より足柄グリーンサービス・関東学
院グループが指定管理者となりました。長年にわたり、き
んたろうキャンプが培ってきた事業形態を踏襲しながら
も、足柄グリーンサービスが有する自然体験活動やプロジ
ェクトアドベンチャーのノウハウ、関東学院が有する学術
的知見やネットワークを活用し、さらなる事業展開を図り
ながら企画運営しています*1。

現在、きんたろうキャンプでは「①自分の良さに気づ

く、②自分に自信を持つ、③豊かな人間性を築くことのできる力を高める」という指導方針を掲げています*2。もちろん、他者の良さに気づくこと、他者を肯定的に捉えるようになることも行く行くの目標となるでしょうが、まずは自分自身が他者から認められている感覚から始まるのが大切であり、「自分が認められている感覚」－「自分を認める感覚」－「人を認める感覚」、この循環*3を体験する機会をつくるのが重要だと考えます。きんたろうキャンプは日常場面とは大きく異なる場面で活動と参加を行い、関係性の相互作用を体験してみることでできる場になります。

また、必ずしもキャンプという活動に限定することなく、先の「1日大学生体験」のような、不登校支援のために得る様々な新企画も積極的に開催していること、キャンプの参加対象も児童・生徒に限定せず、親御さんがリフレッシュするためのプログラムを、子どものプログラムと同時並行で設けていることも大きな特徴です。

今後はこれまで以上に、小中学校にいらっしゃるスクールカウンセラーの先生方と連携の機会が展開していければと思います。そして、今キャンプでどのようなことをしているのか、どのような心理教育支援の方策があるか等について、スクールカウンセラーの先生方へ情報発信していく機会もこれまで以上に増やしていきたいと考えています。

会員の先生方には、きんたろうキャンプを一つの資源として、不登校児童生徒や親御さん、教職員の皆様には是非ご紹介いただければと思います。

<引用>

*1 平成28年度 神奈川県不登校対策自然体験活動事業報告書

*2 神奈川県立足柄ふれあいの村 きんたろうキャンプホームページ

<http://ashigara-fureai.com/不登校対策/>

*3 神奈川県教育委員会 自己肯定感を高めるための支援プログラム

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f536823/>

お問い合わせ先

○足柄ふれあいの村

お電話 0465-72-2040（きんたろうキャンプ専用ダイヤル）

E-Mail kintaro@ashigara-fureai.com

○関東学院大学 カウンセリングセンター（担当 綿貫）

お電話 045-786-7014

Email watanuki@kanto-gakuin.ac.jp

2) 「不登校対策自然活動体験事業 きんたろうキャンプ－きんたろうキャンプの概要と実績について－」

神奈川県スクールカウンセラー協会
臨床心理士
鏡 元

本事業は、「神奈川県立足柄ふれあいの村」が神奈川県の不登校対策の一環として実施しています。

きんたろうキャンプの対象となる参加者は現在不登校の状態にある、あるいは学校を休みがちな小・中学校在籍の児童・生徒で、自然体験活動を通して参加者とふれあい、さまざまな体験活動を行うことにより、「心身のリフレッシュ」「自立性・自尊心の回復」「コミュニケーション能力の改善・向上」等、しっかりとした日常生活を送るための力を養えるような機会を提供しています。また、県内市町村教育委員会及び各小・中学校、各教育支援センター（適応指導教室）等とも連携を図り、参加した児童・生徒の学校生活の再開や社会的自立へつなげていくことを目的としたキャンプを展開しています。

きんたろうキャンプでは1年間を通じて足柄ふれあいの村を中心に、県内の様々な場所で、日帰りから4泊5日までのキャンプを30回程度行っています。参加者には親子を対象とした日帰りの「親子デイキャンプ」、または1泊2日の「親子キャンプ」から参加をして頂き、キャンプという環境や場所、新しく出会うスタッフや参加者などに馴染んでもらうことから始めてもらうことをお勧めしています。そして、徐々にキャンプへの参加を重ねながら、親子キャンプや子どもだけのキャンプへ、1泊2日の短期キャンプから4泊5日の長期キャンプへとステップアップできるように、多様な選択肢を設けるよう心がけています。

キャンプの参加者に関しては、今年度の参加実績は、9月5日の時点での参加者数はのべ52名、保護者は47名との参加となっています。

なお、昨年度実績はきんたろうキャンプが参加者のべ114名、保護者99名となっており、昨年度の8月までの参加者は49名ですので、参加者数はだいたい例年このくらいの人数の方に参加していただいています。

キャンプの参加者からの評価は高く、参加した子供達からは、「楽しかった」「また参加したい」といった感想を耳にすることはもちろんのこと、保護者からも「娘の笑顔をたくさん見ることができ、本当に参加して良かった。」「普段、集団行動・同年代のお友だちと接することがなく、又、知らない大人の方ともあまり接することがない中で、色々な方と話をする事ができ、良い時間を過ごすことができました。」といった感想を聞くことができました。また、親子キャンプではKSCAに所属する臨床心理士が

保護者交流会・保護者相談会などを担当しており「不登校の子の親が集まる機会なんて、普段の生活ではまずないので、貴重なお話をたくさん聞けました。」「大人同士も、色々な情報交換ができて、本当に良かったです。ひとりじゃない。そう思えました。」といった感想や「臨床心理士のお話を聞いて、いろいろな気持ちが少しずつ整理出来そうだなと思いました。」「心理士の先生に具体的なアドバイス頂き、戻ったら進めていこうと思います。」といった保護者自身の気づきや学びにつながる声も数多く聞くことができました。

ご存じのとおり、不登校支援には保護者への支援も欠か

せない要素となっていますが、きんたろうキャンプでは単にキャンプを行うことで参加者にアプローチするだけではなく、キャンプに参加する保護者がそれぞれの思いや悩みを共有・共感すること、更には私たちのような心理の専門家からのサポートやアドバイスにより、不登校に対してより多角的でかつ包括的な支援を行なっています。

以上からも、きんたろうキャンプが参加する児童・生徒だけはもちろん、保護者にとっても学びがあり意味のある活動となっているのではないのでしょうか。

(2) RIFCR研修の報告

2017年8月26日(土)、本郷台の地球市民かながわプラザにて、RIFCR研修を開催しました。

RIFCRとは、アメリカで開発された、虐待発見時の面接プロトコルです。児童虐待は、保育園・幼稚園・学校などの子どもたちの生活の場で発見されることが多いわけですが、“その時保育士・教員・カウンセラーはどのように面接し、何を聞くべきで、何を聞くべきでないか？”を学びました。

RIFCR研修の内容の著作権はアメリカのコーナーハウスにあるため、当局が公認する研修をアメリカで受けてインストラクターの資格を得た人しか研修を行うことができません。日本ではNPO法人チャイルドファーストジャパン(以下CFJ)がトレーナーチームを組み、全国で研修会を開催しています。今回の研修会は、KSCAが主催してCFJのトレーナーチームに依頼する形で行いました。

虐待を受けたと思われる児童を発見した場合、学校などの発見現場で、虐待の調査を開始するのに必要な情報を集めるための面接(これがRIFCR)を行い、児童相談所に通告し、児童相談所と警察・検察が参加して司法面接を行うのが、あるべき形です。調査・捜査としての情報収集をするのは司法面接です。このようにして行われた司法面接での言述は、裁判等での証拠能力を持ちます。司法面接において子どもが事実を歪められることなく語れるために、学校等では必要十分な面接に留めるべきであって、その段階で司法面接のようなことをしてはいけない、というのがポイントです。子どもは同じことを何度も訊かれると、「さっきの答えではいけないのかな？」と考えて、違うことを

話してしまうかもしれません。また、訊かれてしまったがために、曖昧な事を言ってしまう、それが加害者に有利な証言となってしまうかもしれません。私は自分の臨床経験の中で、司法面接のようなことを学校から求められ、知識がないままにやってしまっていたことに気づきました。でするので、子どもと接する現場で働く人たちには、少しでも早くRIFCR研修を受けていただきたいと思います。

本研修会では、上記のような虐待対応の基礎知識に加えて、本題のRIFCR面接のやり方を学び、受講者同士のロールプレイングで実習しました。研修終了後、コーナーハウスとCFJからの受講証が発行されました。また本研修は、臨床心理士資格更新に有効な研修として認定されました。この度の研修会は、KSCAの会員の皆様への還元事業としての意味合いをもって企画しましたので、会員が受講した場合は、受講料8,000円のうちの7,000円をKSCAが補助いたしました。

おかげさまでもちまして、会員18名、非会員6名で合計24名の参加がありました。会員のうちの3名は、この機会に新しく入会された方々です。

今後もまた、有意義な研修を企画して参りたいと思います。

内訳は会員15名、新入会者3名、非会員6名参加者24名

中野 早苗

(3) 場面緘黙についての基礎知識

場面緘黙（選択性緘黙）は、言葉としては知っていたり、そのような児童生徒と関わったりした経験があるSCは多いと思います。ただ、誤解も多いと思います。子どもが話そうとしないから、何とかして話させようとしたSCもいるかもしれませんが、それは間違っています。今回は、らせんゆむさんという元「かんもくガール」のイラストレーターの方のご著書（漫画が中心です）を参考に、場面緘黙の基礎知識をお伝えします。

1) 場面緘黙とは

①家ではごくふつうに話すのに、幼稚園や学校など特定の社会状況で話せないことが続く症状

- ・発話だけでなく、動作がぎこちなくなります。うなずきやゼスチャーができない子もいます。

②200人に1人くらいで、女子にやや多く、入園や入学など新しい環境に入る時に生じるケースが多い

- ・社交不安が高く、人から自分がどう見られるかが過剰に気になります。いったん話さないパターンができると、それは習慣のようになり、そこから抜け出すのに大きなエネルギーが必要となります。

③多くの子が、生まれつき脳が新しい刺激に敏感に反応する「行動抑制的な気質」をもつという仮説が有力

- ・不安が高まりやすく、行動が慎重になるため、環境に慣れるのに時間がかかります。最近では「HSC（Highly Sensitive Child）」人一倍敏感な子、「HSP（Highly Sensitive Person）」人一倍敏感な人、という概念もあります。

④「自分の意思で話さない」のではなく、「不安のために話せない」

- ・「不安症」に分類され、人や場所に慣れるのに長期間かかり、リラックスできても話すことができません。幼稚園や学校で1ヶ月以上、友だち（あるいは、先生）と話せない場合や教室で声が出ない場合は、場面緘黙の可能性があります。自閉スペクトラム症や知的発達の遅れ、吃音症など言語発達の問題が影響していることもあります。

⑤いじめや孤立、うつや不安症状、不登校などの二次障害は「まわりの理解や対応が不十分だ」というサイン

- ・緘黙症状解消後も、いじめや孤立で受けた傷に長い間苦しむことがあります。緘黙症状が長く続いても、自分の状態を理解し、家族や先生やクラスメートからも理解を得て、楽しい学校生活が送れていれ

ば二次障害は防止できます。たとえつらいことがあっても、味方だと思える人と共に、その時できるやり方で問題解決できたなら、その経験は必ず将来の力になります。

2) 場面緘黙への有効な支援

①まわりの人は、子どもが話さないことを責めない

- ・発話を強要しないことが大事です。

②学校生活での不安を減らし、人との楽しい交流体験や何かができるようになった経験をたくさん積んで、自信をつけていくことが大切

- ・家庭と学校が密に情報交換することが必要です。

③「家庭での会話」を「学校での会話」へと段階的に広げていく

- ・ただし、他の問題（言語・運動・学習・社会性・感覚過敏性など発達の問題、家族関係の問題、トラウマなどの心理的問題）をあわせもつ場合は、それに対する支援やケアが必要です。海外研究ではSSRIという抗うつ薬を少量用いて、これらの取り組みの効果が上がりやすくしています。

④スポーツや音楽、アート、ファッション、けん玉、将棋など、好きな分野や楽しめるものが、症状克服の突破口になる

- ・小学校高学年から中学・高校卒業までは、症状改善が難しいです。思春期は自意識が高まり人目が気になって、おなじ学校の人を見た途端、脳のスイッチが「緘黙モード」に切り替わります。だからこの時期に小さな進歩や症状改善があれば、それは本人のものすごい勇気と努力によるものです。

3) 予後

緘黙の人の予後を知ると、何を目指せば良いのかが分かります。

①転校や卒業を機に、自力で症状を克服することもある

- ・新しい環境に入る時、話せない自分を知る人たちの目から解放され、新しい自分にチャレンジしやすくなるからです。

②受験時の面接

- ・面接はある程度話すことが決まっていて、前もって家

庭で何度も練習できます。面接が発話経験を増やす機会となり、改善への有効なステップとなることもあります。事前に大学や専門学校に知らせて、筆記による面接で受験できる場合もあります。

③就労

- ・症状が改善された経験者は、さまざまな職業に就いています。イラストレーターやデザイナーなどの美術系分野、服飾やクリーニング店などの販売系、病院や薬局での事務系、工場や食品店舗での作業系、教師や支援員などの教育分野、医師や言語聴覚士や社会福祉士

や保育士などの医療福祉分野など、本当にさまざまです。

- ・発達障害をあわせもつ子どもや重い行動制限がある場合は、知的発達の問題を持たなくても、手帳を取得し、福祉枠で就労する道を選ぶこともあります。

参考文献：らせんゆむ・著『私のかんもくガール』

林 幹夫

(4) KSCA連絡先

メール：office_KSCA@yahoo.co.jp

ホームページ：<http://www.ksca.info/>

(google検索：「神奈川県スクールカウンセラー協会」)